

実践記録

研究主題 社会科における「たしかな学習成立」をはかる指導法の改善

——作業用紙の活用を通して——

足利市立御厨小学校

1 はじめに

本校では、今年度の重点目標として「ひとりひとりにわかる授業」という学校課題を設定し、各教科ともこの課題にとり組んできた。

学校課題の設定の背景には、児童の実態から、考えが浅い、発表しない、問題意識を持たない、問題を解決しようとする意欲が弱いなどがあげられた。このような子供たちに、なんとかして学習するよこびや意欲をもたせてやりたい。また、そのための指導法の改善にとり組まなければならないという教師の共通の願いから出発したものである。

「ひとりひとりにわかる授業」の研究ということは、意欲的に考え、行動し、追求していく子どもを育ててやりたいという教師の願いである。その根底には、「意欲的に考え、行動し、追求していく子」という本校の期待される子供像があったからである。

この期待される子供像の具現化は、各教科、道徳、特活等の教育活動全般にわたって実施され実現されるものであるが、これは、なかなか困難なことである。従って、重点教科を決め研究を推進していくことがより効果的であろうということで、社会科を中心として、研究を進めていくことになったわけである。むろん、社会科指導の改善で得た研究成果は、他教科へも必然的に影響することを期待してのことである。

2 研究主題設定の理由

社会科指導の研究を通して学校課題にせまるためには、どのような視点から研究を進めたらよいか問題である。そこで社会科の目標、現代社会の要請、児童の実態、学校課題とのかかり合いを考慮し、研究主題を設定することにした。

社会科の目標は、“公民的資質の基礎を育てる”ことである。そのためには、社会についての正しい見方、考え方を養うことが大切である。

日ごとに進歩し変化していく現代社会に生きる子供たちに、適確な情報処理能力を身につけさせ社会認識を深めていくことが大切である。しかし、現実の社会科授業を反省してみると、多くの教材内容を限られた時間内で、すべての児童に学習させようとすると、羅列的な知識のつめこみ主義が展開され、児童の学習への興味を失わせたり学習意欲を妨げる結果となり、一部の児童の積極的学習参加にとどまりがちであった。従って、現代社会の要請に応え、社会科でねらう能力を身につけることは、はなはだ困難である。その原因として、

- (1) 目標や内容の分析と、そのは握が十分できていない。
- (2) 基本的な事項のおさえが十分できていない。
- (3) 指導法の研究が不足している。

以上のような反省点から、目標と内容を明確にし、基本的事項をおさえるには、どのようにしたらよいか、どのように指導法を改善したらよいかを実践を通して考えていかなければならない。これらのことは、有機的に考えて研究をすすめていかなければならないので、県、地区の社会科研究会で研究された指導内容の精選や重点的指導についての考え方をふまえ、学校課題にせまる社会科指導法の改善にとり組むことになった。

3. 研究のねらい

社会科を通して、学校課題である「ひとりひとりにわかる授業」にせまるには、どのような視点から研究を進めていったらよいかということを明らかにする必要がある。

学習の成立する条件としては、

- (1) 学習は個別に成立し、ひとりひとりの児童が必要な学習行動を行うこと。
- (2) 教師の提示する刺激に対し、児童が積極的に反応すること。
- (3) 児童の反応が正しいか否か、即時評価ができること。(フィードバック機構の確立)

などがあげられている。このようなことは、日常の学習指導で行われていることであるが、意図的、計画的に行うことにより、学習成立度は高まるであろうと考え、この研究では、次の二点を考えていくものである。

- (1) 指導過程の中に児童の反応(思考)の場の位置づけと、作業用紙の活用のしかたを明らかにする。
- (2) 作業用紙の活用により評価の方法を明らかにする。

4. 仮説

- (1) 作業用紙の活用により、時中、事後の学習成立度がより適確にとらえられる。
- (2) 指導過程の中で、作業用紙を活用させることにより、積極的に反応し、学習成立度は、質的、量的に高まる。

5. 研究の手順

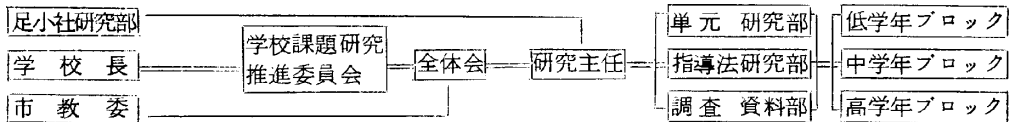
- (1) 教材構造の明確化
 - ・指導要領の目標、内容の分析
 - ・単元の目標、内容の明確化
 - ・目標を分析し、中心概念をとらえる
 - ・中心概念をささえる基本的要素をとらえる
 - ・基本的要素を構成する具体的事実をとらえる
 - ・単元でねらう能力をとらえる
 - ・内容の精選と重点化をはかる
- (2) 指導計画の作成
 - ・単位時間の目標の具体化
 - ・指導過程、評価計画
 - ・作業用紙の形式、位置づけ
- (3) 展開計画の作成

- (4) 授業を実践し、学習成立度をとらえる。
- (5) 指導計画、指導法の改善に役立てる。

6 研究組織

<学校課題研究組織>

(図1)



7 研究の実際

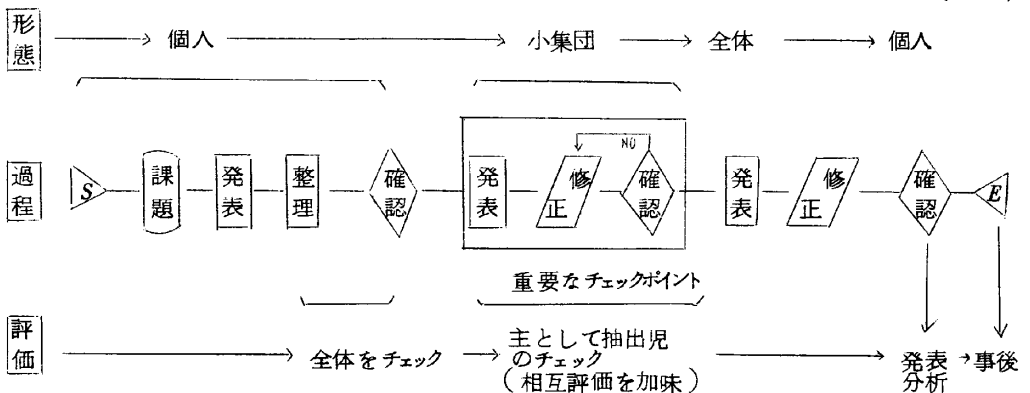
(1) 学習過程について

学習成立には、単位時間の指導過程の中に刺激→反応→確認→強化というサイクルを組み入れ意図的、計画的に診断し反応を強化していかなければならないと考え、作業用紙の位置づけと関連し、指導過程のポイントにこの機構を必ず位置づけ、チェックポイントとしている。このチェックポイントで通過しなかった児童については、より適切な情報をあたえ反応をより確かなものにし、ひとりひとりの児童に学習が成立するように配慮している。

当面の問題として、一斉授業の中での「集団化」「個別化」は、どうあるべきかということについての問題が残されている。

小2（「工場ではたらく人のしごと」「なべができるまで」）の指導過程の例 <追求の段階>

(図2)



単元または小単元の指導過程の中で、「学習課題は握」「問題追求」「まとめ」の段階などで、学習形態は変わるが、基本的には上図のような学習形態をとっている。しかし、現在のところ、それぞれの段階での学習形態についての統一的な考えは、まだできていない。

(2)作業用紙について

作業用紙についての考え方や、児童の発達段階などにより作業用紙の形式や活用方法は異なるが基本的には、次のように限定した考え方で実践することがより実際的であろうと考えた。

位置づけ — 単位時間の指導過程の中で、最も重要な場面（問題解決、まとめ等）に1～2か所位置づける。

ねらい — 学習成立をたしかめるため、学習の思考過程を明確にするため。
（より積極的な反応を期待）

形式 — 誘導方式的な作業用紙、資料を記載した作業用紙、欄のみとったもので拡散的思考の可能な作業用紙等。

以上、基本的な考え方を示したものであるが、今の段階では、指導過程の中での位置づけや形式についてはあまり原則にとらわれず、教師のくふうによる自由な立場で効果的に活用している。

しかし、実践をつみ重ねて、より効果的な位置づけや形式等については十分考えていきたい。

単元（小単元）指導計画作成の際に作業用紙の活用について検討し、この段階で、形式を考え、指導計画に位置づけをしている。

<作業用紙低学年の例> (図3)

2年 月 日 なまえ

学習もんだい			
よ そ う	じゅんしよ のようす	原りよう ↓ □	→ せい品 ↓ □
	きかいやはたらく のようす		
しらべて わかったこと	じゅんしよ のようす	原りよう ↓ □	→ せい品 ↓ □
	きかいやはたらく のようす		
気のついたこと			

<作業用紙高学年の例> (図4)

作業用紙 5の なまえ

1.問題	
2.予想	
3.調べる 計画方法	
4.調べてわかったこと	
5.まとめ (1)	
まとめ (2)	

※ 上記の作業用紙は2年、5年で活用したものの一例だが、低学年の場合は、小単元の見通しを

つけ、1～2枚、指導内容に合わせ、形式を考えて活用している。高学年の場合は、形式を、上記のようにしたものを多く活用している。

(3) 評価について

一般に評価については、短期的なもの、中期的なもの、長期的なものがあり、その方法としては観察、発言、作品の分析、テスト等が考えられるが、学習の成立という点からは、短期的な評価が大切であると考えられる。そこで、日常の授業の中で可能な評価ということで、次の二点について考えていく。

① 発言、観察の分析による時中の評価

② 児童の思考の変容をみる事後の評価

①については、単位時間の指導過程にチェックポイントを設定し、そのチェックポイントで、作業用紙のチェックまたは、発言分析等で評価していく。特に中、高学年においては自己評価も可能なので、この点十分考慮して自己評価ができるような配慮をしている。

教師が観察したり、発言を分析したりして、ひとりひとりの反応を質的にとらえるためには、ひとりひとりの作業用紙や発言をチェックすることが望ましいことであるが、時中評価では不十分である。そのためサンプル児を抽出して評価することになっている。

サンプル児の抽出については、知識、理解、能力、態度、事前調査等多角的に分析して抽出することが望ましいが、教師の日常観察によるデータと事前調査の結果から上、中、下位2～3名抽出することにした。この抽出された児童は固定的なものではなく、学習の成立度から判定し、単位時間あるいは小単元により替えていくようにした。

このように抽出された児童を意図的に指名または観察し、反応の傾向性をとらえることにした。しかし、正確さという点では疑問も多いので、実践を積みかさね、より確かなものにしていきたい。

②については、指導後の児童の変容（成立度）をとらえようとする評価で、その結果から次時の指導の手だてを考える手がかりとしていく。

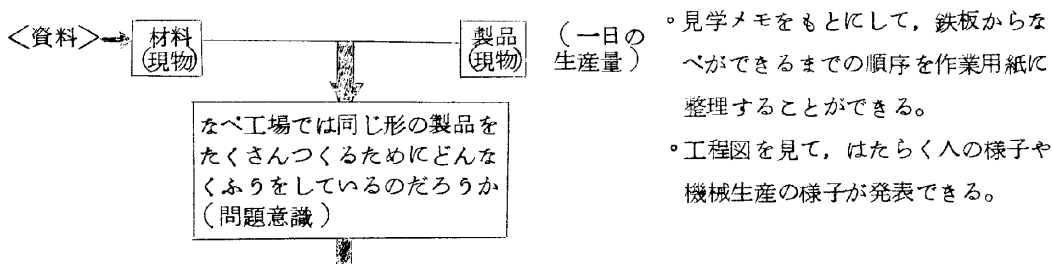
8 実践例

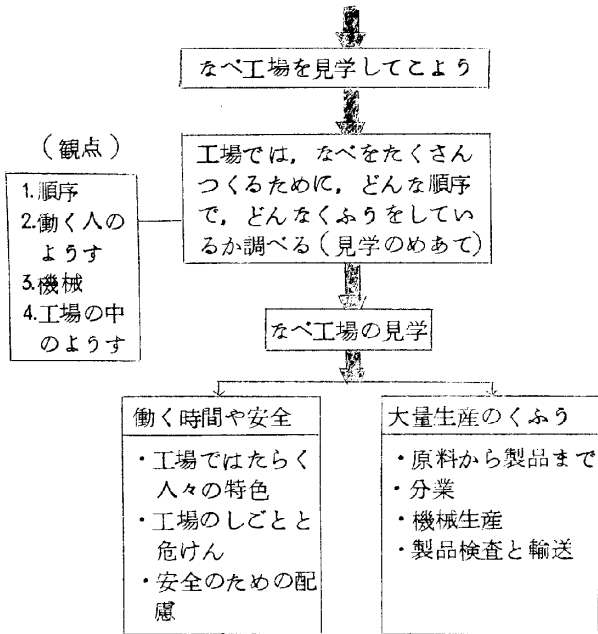
2年 単元名「工場ではたらく人のしごと」

(1) 学習の展開計画

(図5) (2) 本時の指導

「工場ではたらく人のしごと」展開計画 ① ねらい





② 問題意識を高めるために

本時を展開するに当たって、特に問題意識をどうもたせるかを配慮し、図2のような展開過程をたどることになった。

教師が設定した学習問題と児童が気づいた疑問が合致することが大切である。そのために(原料)→(製品)という意外性の強い資料を与えたことによって同質の問題意識をもつことができた。

③ 作業用紙の活用

本時に至るまでに、学習問題、予想、調べてわかったことを作業用紙に記入させた。(形式は図3を参照)記録をさせることにより、ねらいについて具体的に、より正確にとらえることができるであろうと考えた。

④ 学習の展開

〈本時の指導〉	〈抽出児童の反応と評価〉(抽出児 P17. 18. 26. 27. 35. 36)																
<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習のめあてをはっきりする。 ・工場見学メモをもとに発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ・工程について ・機械のようす ・はたらく人のようす ・工場見学メモをもとに作業用紙に整理する <ul style="list-style-type: none"> ・工程について ・機械生産のようす 	<p>(授業の中では各層の児童を指名し、反応をとらえたが、ここでは抽出児の主たる反応のみとする)</p> <p>P36 材料を機械で丸く切って、色をぬって、もようをつけ箱につめます。</p> <p>P27 鉄の板から型ぬきをして、機械で形をつくりました。まわりをきれいにして、下ぬりをして……(略)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ P36は、かなり大ざっぱな視点で、工程のみをとらえていた。 P27は、工程についてはかなり正確にとらえていたが、機械のはたらきや、人ののはたらきは不十分である。 <p style="text-align: center;">確認1</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: center;">抽出児 観点</td> <td style="text-align: center;">P35</td> <td style="text-align: center;">P26</td> <td style="text-align: center;">P17</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">工程</td> <td style="text-align: center;">△</td> <td style="text-align: center;">○</td> <td style="text-align: center;">◎</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">機械</td> <td style="text-align: center;">△</td> <td style="text-align: center;">△</td> <td style="text-align: center;">○</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">分業</td> <td style="text-align: center;">×</td> <td style="text-align: center;">△</td> <td style="text-align: center;">○</td> </tr> </table> <ul style="list-style-type: none"> ・抽出児の反応のようすを、作業用紙を見てチェックし、評価した整理のすまなない児童については、工程の組写真を与えた。 <p>(注) ◎○△×は成立の程度を示す。</p>	抽出児 観点	P35	P26	P17	工程	△	○	◎	機械	△	△	○	分業	×	△	○
抽出児 観点	P35	P26	P17														
工程	△	○	◎														
機械	△	△	○														
分業	×	△	○														

- ・整理したことをもとにグループで話し合う
- ・修正する

- ・グループでまとめたことを発表する
 - ・工程図と生産のよすの写真を掲示

(発表したことを板書)

- ・わかったことをまとめる
 - ・発表をもとに修正つけ加え
- ・まとめたことを発表する。

・次時の課題

- ・より深く追求させるために、4人グループで話し合い、つけ加えや修正をさせた。話し合いのいきづまったグループには補説をしたり、写真を与えたりしてやった。

確認2 <学習成立度の判定>

抽出観 点	P35	P26	P17
工程	○	◎	◎
機械	○	○	◎
分業	△	○	◎

人数 観 点	成 立	不 成 立
工程	35名	3名
機械	35名	3名
分業	27名	11名

- ・グループで話し合いその後の成立度を抽出児の作業用紙をチェックして判定した。その結果は左の表の通りである。P26、27の児童がチェックポイントを通れば、中、上位児童の学習は成立したものと判定した。

- P26 順序は、切る、形を作る……(略) ここでは機械を使ってやっています。シールをはったり箱につめたりするのは女の人がやっています。しごとによって、やる人がちがいます。
- P35 順序は、切る、形を作る、これは大きな機械でやっていました。色をぬるのは、男の人がる人でやっていました。…(略)

- ・グループで話し合い各自に修正させることにより、かなり工程の順序がよく整理され、分業や工程の関連などもよくとらえられてきた。しかし、下位の児童には分業については、とらえられないので写真資料を示し、わからせていった。
- ・黒板に整理された事項と各自のものを比較整理させ、わかったことを自分のことばで発表させた。

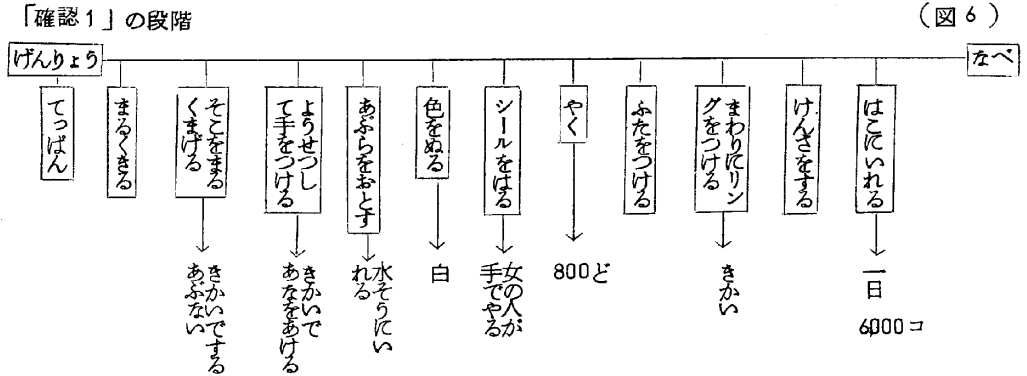
確認3 <学習成立度の判定>

抽出観 点	P36	P35	P17
工程	○	○	◎
機械	○	○	◎
分業	△	○	◎

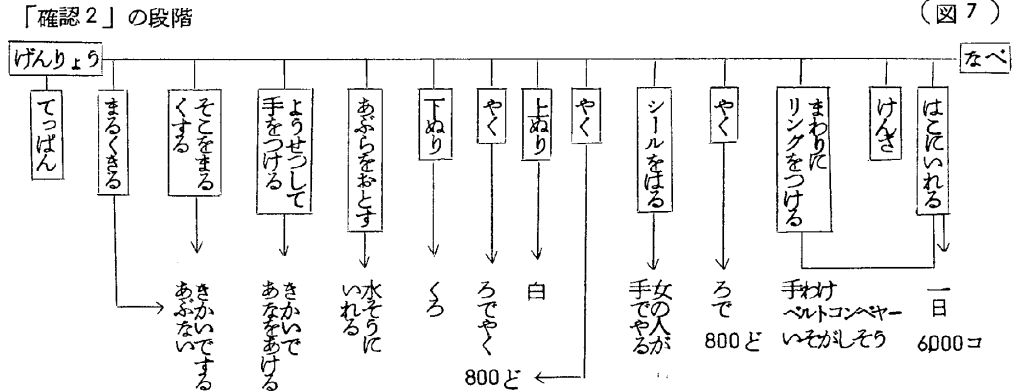
人数 観 点	成 立	不 成 立
工程	36名	2名
機械	36名	2名
分業	35名	5名

- P35 かたちを切ったり色をぬったり、機械のほかに手わけをしてつくっています。
- P36 大きな工場の中で、形をつくったり色をぬったり…(略) たくさんの方がはらいていました。
- ・ここでは抽出児の発言の分析により成立度の判定をした。(左図参照)

(5) 抽出児の追跡 (中位児 P 27)



材料から製品までの工程についてはかなり正確に観察することができたが、機械による生産や分業のしくみについては、不十分なとらえ方をしていた。



「確認1」の段階では、工程だけを羅列的に発表したのに比べ「確認2」の段階では「鉄板をまるく切る時や、そこを丸くする時は、大きな機械でガチャンガチャンやっていた。」「色をぬったなべをやく時は800度のろの中へ、ベルトコンベアーみたいのではこばれ、出てくるとできあがっていた。」など具体的に機械のはたらきや、仕事の様子について発表できるようになった。

「確認3」の段階では、工程図と写真を見ることにより、工程間の関連や分業のしくみについても追求するようになった。

(6) 結果の考察

図8の時中評価は、「確認3」の段階の結果である。事後の評価は指導後作業用紙を見て評価したものである。事後の評価と比較しても、「確認3」の段階で判定した結果と大差はみられなかった。

従って、ひとりひとりの児童の反応が確実にとらえられなくても、抽出児の思考の変容を追っていけば、全体の学習成度や反応の傾向性がかめるのではないと思われる。

- ① 作業用紙に記入する場合、書くことに抵抗があり、時間がかかりすぎる。他教科と関連し、箇条書きや要点を書き表わせるような練習をしておくべきである。
- ② ひとりひとりの児童の問題意識を高めるための発問、資料の提示をどうくふうしたらよいか。
- ③ 追求の段階で、児童の要求する資料をどのように与えたらよいか。
- ④ 一斉授業の中で、個別化をどのようにすすめていったらよいか。

10 おわりに

全職員が一つの目標に向かって研修を深めたことは、職員の和をはじめ研修意欲が高まり、職場に活気が出て来た。このことは、児童に与える影響も大であると考える。

「たしかな学習成立」をはかる指導法の改善には、いろいろな手だてがあると思うが、本年度は作業用紙の活用による評価を中軸に、つまづきに対する手だてということも考えてみた。

研究をすすめていくうちに、いろいろな課題が出てきたが、これらの課題は、今後の研究課題として継続的に研究をすすめていき、本校の学校課題にせまっていこうと考える。

今後の課題の中から、来年度は特に「どのように問題意識を高め、追求のための資料をととのえてやったらよいか」を、今年度の研究をふまえ、更に深めていきたいと考えている。

評

本校における研究の成果は、すでに、昭和50年11月、栃小社研県南地区大会において発表され、多くの参会者から好評を博したわけであるが、研究が短期間にもかかわらず、特に大きな成果をあげ得た理由として、常に実践を通した帰納的方法を重視したこと、さらに学年ブロック研究活動を特に重視し、「研究—実践—発表」の場がすべての先生方に約束されていたことなどがあげられよう。

このように、日常の教育活動の中から、問題を構造的にとらえていること、研究仮説が明確な視点をもって選択された事実と、透徹した理論によって支えられ、しかも焦点化されていたことなど、わたしたちの今後の研究活動のあり方に対して示唆するところは、まことに大きいといえよう。

「研究の反省」「今後の課題と展望」まことに卓見である。「学習成立」へのアプローチの方法は多様である。実践の中から集約された様々な問題点に対する理論的な考察も加えられ、「ひとりひとりにわかる授業構造」の解明をめざし、今後とも、より、目目的な研究推進活動を期待したい。